

## 漂泊日記[承前] : 短歌

著者	馬場, ?香
雑誌名	龍南
巻	2 2 1
ページ	4 7 - 4 7
発行年	1932-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7057">http://hdl.handle.net/2298/7057</a>

短歌

漂泊日記

馬場清香

さら／＼と微かに銀杏に音づれて秋雨去りぬ今さびはてぬ  
窓越しに聞ける時雨のさびしきに立ちより見れば戸外暗かりき  
秋雨のむせべるときは龍田なる小峰の丘に泣く魂のあらむ  
秋雨の今宵の如く降るときは遙かに遠き母をしぞ思ふ  
戀しきは人にしあるか今日もまた街に出でゝは人を見るなり  
豆賣の大鼓のさびし銀杏ちれる祠のあたり風まひたちぬ  
山伏の吹けるほらがひ朗々と暮の巻にひゞき渡れり  
初戀の乙女と故意に仲絶ちし我がひがみをば悲しく思ふ  
夕ざれし田畑の水の清く澄みて暗き水底に魚の行く見ゆ  
うらゝかに晴れし冬の日高臺に遠山の雪輝ける見ゆ  
煙草くはへ思ふことなくなとゞひとり街を歩けり冬の日の午後